

カオナとケキピ

カオナの反乱

19世紀のハワイにおいても、ポリネシアの他の島々と同様に、キリスト教受容における島民の主体性を示す運動が幾つか発生した。中でもハワイの宗教史上、象徴的な事件としてしばしば取り上げられるのが「カオナの反乱」である。この事件は、会衆派教会が現地の独立組織として活動を開始した1860年代後半、ハワイ島北コナ地区で、ホノルルの元判事であったジョセフ・カオナが教会を占拠することで顕在化した宗教運動だ。

カオナは、日曜礼拝の説教を白人牧師と分担して行うなど、会衆内で影響力を持つ信徒であった。だが、1867年12月頃より彼は建設中の教会建物の使用权を巡って白人牧師と対立するようになる。会衆内で多数派であったカオナ達は教会を占拠するが、裁判の結果、教会建物は閉鎖され、使用を禁止される。その後、彼は多数の教会信徒を率いて同地区の王族の所有地で共同生活を開始する。彼のグループと白人牧師のグループは、今度はこの土地の貸借権を巡って対立し、1868年10月、抗争の中で白人保安官が殺害されるに至って、軍隊が派遣され、彼の率いる運動は「反乱」として鎮圧されたのだった。

彼の宗教運動は、現金収入につながる労働を拒否し、キリストの再臨と世界の終末をひたすら待ちながら共同生活を続けるという典型的な千年王国運動であった。一方、白人達は、彼の教えをハワイの伝統宗教とキリスト教が融合した呪物崇拝に過ぎないと見なしていた。しかしながら、彼らにとって最も重要な「呪物」はハワイ語聖書であった。白衣に身を包んだ彼らは、普段は“刀のように”聖書を腰にぶら下げ、兵士がキャンプ地に踏み込んだ時、彼らの高く突き上げた手には聖書が握られていたと言う。聖書はハワイ語に翻訳されることで、マナ(霊的力)を吹き込まれ、新たな文化的アイコン、白人と戦うための道具として彼らのものになっていたのである。

宣教師系の英字新聞、政府系の英字新聞、ハワイ語新聞、白人牧師の回想録、反乱の鎮圧に向かった元帥の回顧録などの史料が残されているこの事件は、歴史的事件の再構築という観点からも非常に興味深い。例えば、宣教師系と政府系の新聞では、土地貸借権を巡る抗争についての解釈や保安官殺害の描写に大きな隔たりがあるし、新聞に掲載されたカオナの信者の手紙と白人牧師の回想録は事件について相対する視点を提供してくれる。

カオナの運動が、教会内の主導権争いから、経済的援助や居住地の要求といった経済的闘争へと転換していったことにも留意しなければならない。そこに19世紀後半のハワイ人のおかれていた状況を見て取ることができるからだ。また、自らの集団を「オハナ(家族)」と呼び、海岸付近にキャンプ地を設置したこと、投獄や裁判によって運動が処理されていったことなど、彼らの運動と1990年代のハワイ人の主権回復運動との間に幾つかの類似点が認められるのも興味を引く。

ハワイ語で「カオナ」とは「隠された意味」のこと。ハワイ語の歌や詩では一つの言葉、一つの文句に裏の意味を忍ばせる。その隠されたもう一つの意味が「カオナ」だ。この「反乱」が多義的に読み込まれるテキストであったと考えれば、反乱の首謀者/運動の指導者であった彼の名は極めて暗示的である。

独立系ハワイ人教会の誕生

1903年4月、ホノルルのケ・アラウラ・オ・カ・マーラマラ教会において、ジョン・ケキピ・マイアはホオマナ・ナアウアオの創立50周年を祝う記念講演を行った。「ジュビリー・ブック」と呼ばれるこの記念講演の冊子は現在も同教団の信徒の間で流通しており、ハワイ語から英語への翻訳も試みられている。

「ジュビリー・ブック」によると、1853年4月、当時15歳であったポロアイレフアという少年が、神と契約を結んで病から救われ、伝道活動を開始する。彼は自分の奇跡の回復について説いて回り、幾つかの会衆派教会で説教師として活動した。彼の教えは救済の条件として悔悛を強調する極めてオーソドックスなものであったが、その行為は呪術と見なされ、幾度か彼は投獄されたようである。

1881年2月、ハワイ島北コハラ地区の自宅で、ケキピは初めてポロアイレフアに会う。当時、裕福な農園主であったらしい彼は、ポロアイレフアの呪術的なものと噂される教えに興味を持ち、家庭礼拝を司ってもらうことにしたのである。2ヶ月後、彼はポロアイレフアに礼拝式で説教をするように命じられ、聖書を無作為に開いて目に止まった聖句に基づき説教を行う。3日目の説教が終わると、ケキピはポロアイレフアから自分が宣教師として神に選ばれたと告げられる。彼はその場で身体の不調を感じるが、自分の犯した罪を悔い改めるや否や痛みは消え、仲間達の前で神への帰依を宣言したのである。

当時、ケキピは北コハラ地区の会衆派教会の信徒であったが、同地区で独自に伝道活動を行い、「病気の時にこそ神が正しきものであることが分かる」と説き、悔悛と信仰治療をその教えの中心においた。しかし、その活動は時に白人牧師の批判にさらされることもあったようだ。彼は、数回にわたり夢の中で独立教会の設立を促す神の声を聞き、1889年にホノルルに移り住み、カラーカウア王に接触して自分の教えを国教にするよう提案する。国王の説得に失敗した彼は、1890年に会衆派教会を去り、教団の設立準備を始めた。こうして、王朝が転覆して半年後の1893年7月にケ・アラウラ・オ・カ・マーラマラ教会を母教会としてホオマナ・ナアウアオが設立された。

「ジュビリー・ブック」は、ケキピにとって真のキリスト教への回心の物語であったが、それはまたハワイの伝統宗教の特色を色濃く映し出したテキストでもあった。夢見はハワイの宗教文化の特徴の一つであり、また、自然界に現れる様々なサインや予兆の解読は、古来、極めて重要な行為であった。このような文化を持ったハワイ人にとって、ハワイ語聖書は無作為に開くことで神と交信することができ、夢見の解釈を助けてくれる道具であったのである。これもハワイ人が聖書を自らのものとする一つのあり方であったと言える。

カオナのように正面から白人勢力に衝突したわけではないこの独立教会の創設者の名も、白人と白人の宗教に対する当時のハワイ人の態度を暗示しているかのようだ。「ケキピ(ケ・キピ)」とは「反抗・反乱(the revolt)」の意味。私がおのことに気がついたのは、ある地域で起こった反乱に関するハワイ語新聞の記事をケキピについてのものと勘違いした時だった。